

# 津波警報 正しく理解を

## 別海で防災考える集会

### 地域住民ら積極的に質問



危険箇所を挙げて熱心に地域の防災地図作りに取り組む住民とスタッフ

【別海】津波警報の科学的意味を知って、住民自ら「逃げる」という行動を選択してもらおうと、オホーツク沿岸の別海町本別海の地域センターで11月29日、「科学者との対話を通して津波防災を考える住民集会」が開かれた。北大の科学者と一般住民をつなぐ人材育成プログラム修了生グループが、津波の専門家の北大大学院理学研究助教の西村裕一氏の協力を得て主催した。同30日には同じ沿岸部の尾岱沼地区でも行われた。

#### 北大のプログラム 西村氏の協力で 修了生グループ

科学のあらゆるジャンルで専門家の研究を一般住民に分かりやすく伝えるための人材育成プログラム修了生のうち、せっかくなので警報が避難行動に結びつかない津波に絞って伝えているグループで、北大科学技術コミュニケーションセンター養成ユニット客員教授の隈本邦彦氏を責任者に学生や主婦らの修了生9人が来町。本別海地区では漁業者、高齢者など地域住民約50人が積極的に質問して津波防災について考えた。

最初に西村氏が「世界の津波・別海の津波」と題して、現在の津波研究の最前線につ

(坂上めぐみ)

いて講演。「津波は海の近くにいっても正しい知識があれば逃げられる」ことを前提に、別海町沿岸部に津波が来る可能性についても言及。道内の地質調査で平均すると500年に一度くらいの割合で津波は起きていることがわかっており、「いつ起きてもおかしくない、ただ、津波は地震の後に来るので、津波予知は可能」とした。ほとんどが漁業者である住民は「地震の時、沖で操業中なら沖にいるべきか?」「津波到達予測時間に潮位の変化がなければもう大丈夫か?」など質問。西村氏は「基本的に沖から帰るべきではない。また、港にある船を沖に出してはいけない。震源が近い地震では沖へ出よう

とする途中で津波に遭う可能性がある」とアドバースした。また、「津波警報は誤差があるので解除まで安心してはいけない」と警告した。

修了生らは津波警報が予想される波の高さとは平均海面からの高さであり、地域の港の実際の海面の高さ、満潮、干潮によって大きく異なり、「高さ1メートルの津波予想でも実際には干満の条件で1・5メートルになることもある」と例を挙げて報告した。また、住民がグループごとに地域の地図を広げて、情報交換しながら危険な場所を記入し、防災マップ作りにも取り組んだ。

隈本氏はこうした取り組みのひな形を確立し、「一般の人に伝わり切っていない科学知識をわかりやすく伝え、防災に生かす活動を、自治体の防災職員などにもやってもらえよう」と話している。